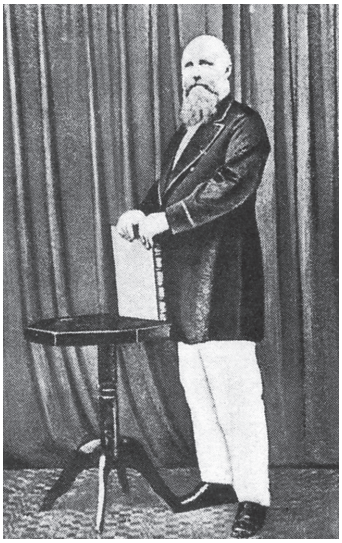
操觚者ジョン・レディ・ブラックの出発

―『日新真事誌』への道―

奥　　武　則

操觚者　そうこしゃ　操觚の「觚」は四角い木札のこと。古代中国でこれに文字を書いたところから，詩文を作ること，文筆に従事することを「操觚」と呼んだ。明治期日本の新聞草創期に「新聞」を指す言葉として，この中国古典由来の熟語が好んで使われた。「操觚者」はつまりは今日の「ジャーナリスト」である。

はじめに――本稿の射程



ジョン・レディ・ブラック
（『十大先覚記者伝』（1926年）より

ジョン・レディ・ブラックJohn Reddie Black（1826～1880）に関して，私はすでに２つの論文を発表している[1]。そこでふれたように，ブラックについては「近代日本ジャーナリズムの父 the father of modern Japanese journalism 」という評価がある。『英文毎日』記者などをしていた花園兼定が，1926年に刊行した英文の著作[2]の中で，そう“命名”した。これもすでに記したことだが，私は花園によるこの“命名”をまことに正鵠を得たものと考えている。

既発表の２論文では，生誕からオーストラリア移住，さらにオーストラリアにおけるブラックの活動に至るまで，従来知られていなかったブラックの伝記的事実に関して多少とも明らかにすることができた。

1854年10月29日，ブラックは前年11月に結婚した新妻エリザベス・シャーロットと女性使用人１人を伴って南オーストラリア・アデレードに到着した。７月26日，ロンドンを出航して以来３カ月に及ぶ船旅だった。ブラックは一緒に移住したリチャード・ジョセフ・ライト[3]とともに「Black & Wright 社」を立ち上げ，貿易，船舶代理店，保険代行業などを営む「総合商社」として短期間に成功した。1857年11月には，商業会議所委員にも選ばれている[4]。だが，理由は不明だが，翌1858年６月には会社の解散，資産競売に追い込まれてしまう。

「実業家ブラック」が消えた後，変わって「歌手ブラック」が登場する。ブラックが歌手としての才能を持ち，来日後もときにそれを披露していたことは，従来から指摘されていた。しかし，オーストラリアにおける歌手活動の実態が分かっていたわけではない。拙稿では，現地新聞の記事等からブラックが最大級の賛辞を受けていた「人気歌手」だったことを明らかにした[5]。

その「人気歌手ブラック」は1861年４月以降，シドニーなど各地で「さよなら公演」を行った。そして，拙稿で述べたように，「歌手ブラック」の活動を伝える新聞記事は，*The Mercury* に1861年６月14日から９月13日まで８回載ったホウバートタウンでの公演告知が最後となる。ホウバートタウンはタスマニア島の中心都市であり，*The Mercury* は同島の地元紙である。「実業家」として挫折したブラックは「歌手」に変貌した。だが，その「歌手ブラック」も短期間で姿が見えなくなる。

ジョン・レディ・ブラックは，明治5年3月17日（1872年4月24日），横浜で日本語新聞『日新真事誌』を創刊する。「近代日本ジャーナリズムの父」の“称号”は何よりも，彼の『日新真事誌』を舞台にした活動に由来する。本稿は，消えた「歌手ブラック」のその後を追い，『日新真事誌』創刊に至るまでのブラックの足跡に光を当てる。

1　フリーメイソン[6]として――インドのジョン・レディ・ブラック

オーストラリア・ホウバートタウンでの「さよなら公演」を告知した新聞記事は前述のように，1861年9月13日が最後である。この「さよなら公演」の時期から考えて，前稿では「ブラックがオーストラリアを離れたのは1861年中だったと思われる」と記した[7]。「確証」があったわけではない。「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」について，さまざまな新しい知見を得たオーストラリア国立図書館の新聞データベース http://trove.nla.gov.au/ndp/del/home も，残念ながら，この点に関しては何らの情報も与えてくれなかった。データベースに収録されている限り，当該時期の新聞の船舶情報 Shipping Intelligence 欄に，John Reddie Black はもとより，彼とつながる可能性のある人名は見当たらなかった。

それまで持続的に消息が伝えられていた「歌手ブラック」が消え，しかも「さよなら公演」が行われていた以上，1861年９月以降に彼がオーストラリアを後にしたとの推測は許されるだろう。しかし，どうやら1861年中はまだ彼はオーストラリアにいたようだ。その点では前稿で離豪の時期を「1961年中」と推測したのは誤りだった。この新しい推測の根拠は，ブラック自身が，その

唯一の著作 *Young Japan : Yokohama and Yedo*[8]の中に記していた。日本に来ることになったきっかけを記した部分で，その点は後にふれることになるが，ここでは離豪時期に関連して次の記述に注目しておく。

> この人は，ヴィクトリア州バララートのジョージ・ホテルで知り合いになった時に，「今，日本から来たばかりだ」と私にいった。新聞は，以前の三年間（というのは，このことは一八六二年のことだった），この新開国（日本）のニューズを，現状と過去の歴史について，少しずつだが，しばしば流していた[9]。

バララート（バララット）はメルボルン Melbourne から西北西に100キロほど内陸に入ったところにある都市である。つまり，くわしい時期は不明だが，1862年，本人の記憶に間違いがなければ，ブラックはまだオーストラリアに滞在していたことになる。

とはいえ，はなばなしく「さよなら公演」を各地で行っているのだから，1862年の早い時期にはオーストラリアを離れたと考えていいだろう。では，行き先は，どこだったのか。この点について，前稿では「おそらく，インドを経て中国にわたっただろう」と記した[10]。「インドを経て中国へ」という推測は従来からあったものだが，特に実証的な根拠に接していなかった。先ごろ，インドと中国におけるブラックの足跡に関する興味深い先行研究の存在を知った。近代日本写真史の研究者であるテリー・ベネットの２つの著作である[11]。

ブラックが後に日本で写真誌『ファー・イースト *The Far East*』（日本で発行された英字紙類については初出時だけ原タイトルを併記する。以下，同様）を刊行することは，彼の経歴の中で比較的よく知られたことだろう[12]。刊行全期間を通じて『ファー・イースト』には，当時の日本を知る貴重な写真約750枚が収録されている。少なくとも20人以上の写真家がかかわり，多くはオリジナルに撮影されたものという[13]。ブラック自身，アマチュアの域を超えたカメラマンだった。『ファー・イースト』は近代日本写真史に大きな足跡を残した。私自身，この領域の研究に目配りしていなかった不明を恥じないといけないが，写真史研究者がブラックに注目するのは当然と言えば当然である。

ベネットによると，オーストラリアを後にしたブラックは，1863年，当時イギリス領だったインド・ヒマチャル＝プラデシュ州の州都シムラSimla（現在の表記はShimla）にその姿を現す。シムラはヒマラヤ山脈の西側にあって，標高2000メートル以上もある高地だ。イギリス統治時代は「夏の首都」とされていた。現在も避暑地として知られる。この年６月24日，ブラックは同地のフリーメイソンのロッジ（集会所）への入会を認められている[14]。

フリーメイソンは，中世における石工のギルドに起源を持つとされる友愛団体である。1717年にロンドンでグランド・ロッジが創設された後，世界各地に広がった。各地の「ロッジ」はグランド・ロッジの認可を受けた地域の活動拠点である。フリーメイソンは日本では「世界最大の秘密結社」といった言葉とともに語られることが多い。会員が多くの場合，非公表で，非公開の入会式な

ど独自の儀式が行われることから，謎めいた雰囲気を漂わせているのは事実かもしれない。だが，基本的には「陰謀」めいたこととは無縁の国境を越えた友愛を理念とする慈善団体と考えていい[15]。

ブラックが所属したロッジはヒマラヤン・ブラザーフッド・ロッジNo.673 Lodge of Himalayan Brotherhood No.673で，職業は「歌手 vocalist」，年齢は「37歳」と記されているという。1826年生まれのブラックは1863年時点でたしかに37歳である。

しかし，ブラックはシムラには長く滞在しなかったようだ。同地のロッジ入会のわずか３カ月後の９月22日，今度はムスーリー Mussoorie にあるロッジに加わっている。名簿には「アーティスト artist（歌手singer）」とある。ムスーリーはシムラの南東約50キロに位置し，標高約1800メートル。シムラと同じように避暑地として知られる。ブラックはインドの暑さを避けてシムラやムスーリーに滞在するイギリス人を相手に歌手活動をしていたのだろう。

ブラックの履歴を追う時の流れとしては先に行き過ぎてしまうが，以下，ベネットに拠って，フリーメイソン・ブラックのその後に追っておく。ブラックは，次に横浜ロッジ No.1092の設立申請人の１人としてその名前が登場する。このロッジは慶応元年12月14日（1866年１月30日），認可された[16]。さらにブラックは明治２年６月27日（1869年８月４日），新しいロッジ（O Tentosama Lodge No.1263）に移る。「職業」は「編集者 Editor」，年齢は「44歳」。ブラックは，まだ『日新真事誌』は創刊していないものの，すでにこの時期，英字紙『ジャパン・ガゼット*The Japan Gazette*』の編集人だった。

横浜ロッジNo.1092 設立は，『ヤング・ジャパン』にも記されている。「話す値打ちのある社会の出来事のうちで，フリーメイスンの地方支部の設立を省略すれば，きっと叱られるだろう」という書き出しで，経過も含めてかなりくわしく報告されている。ただし，ブラック本人が設立申請人の１人だったことを含めて，彼が設立に関与していたことについては何もふれていない。だが，当事者だっただけにくわしい経過が記されている（たとえば，最初の設立申請はなぜか香港で留め置かれていたままで，２度目の申請で認可されたという）。さらに，次のような記述にフリーメイソン・ブラックの喜びを読み取ることもできるだろう。

> ［……］十一月二十日，支部は自分のために特別に設計された，素晴らしいホールを持つに至った。それは仲間のＪ・Ｄ・キャロル氏が建てた立派な倉庫の上にあった。設備は，立派なホールと大食堂，それに組合運営に必要な，いくつかの小部屋であった。こうした建物の中で，これまで横浜にはなかった最も幸せな夜会が開かれた[17]。

「素晴らしいホール」をもつ支部［ロッジ］の所在地は，ロンドンのユナイティド・グランド・ロッジ監修のもとで刊行された記録[18]に，「Main Street, Yokohama (Nihon), Japan」と記されているものだろう。

『ヤング・ジャパン』の中で，フリーメイソンに関する記述はこの部分だけだが，ブラックが横浜におけるフリーメイソンの中心人物の1人だったことはまちがいない（〈補注〉参照）。ブラック

はいつフリーメイソンになったのだろうか。判明しているフリーメイソンとしての履歴は，すでに述べた1863年６月24日，インド・シムラでのロッジ入会である。だが，これがフリーメイソンとしての最初の履歴かどうかは分からない。

ブラックが移住した南オーストラリア・アデレードには，植民開始間もない1838年以降，いくつものロッジが設立されている。ブラックが「Black &Wright 社」の経営者として活躍していた1850年代後半にはアデレード，ポート・アデレード，およびその周辺に所在したと思われるロッジが６つも確認できる[19]。

その「密度」を他のイギリス植民地と比較する材料はないが，少なくとも南オーストラリアには相当のフリーメイソン人口があったことはまちがいない。フリーメイソンは前述のように友愛を理念とする慈善団体である。つまり，「慈善」を行うことができる有産者の団体であり，地域名望家が加わることが多い。成功した実業家（後に挫折するのだが）としてブラックがアデレード在住中にすでにフリーメイソンだったとしても不思議はない。

いずれにせよ，ある時期，ブラックはフリーメイソンとなったのである。フリーメイソンについては先に「基本的には「陰謀」めいたこととは無縁の国境を越えた友愛を理念とする慈善団体と考えていい」と述べた。では，ブラックにとって，フリーメイソンであることは，どのような意味を持っていたのだろうか。どのような動機，あるいはきっかけで彼はフリーメイソンになったのだろうか。ブラックの生涯を考える意味で，こうした問いかけは重要だろう。だが，本人の「告白」はもとより，答につながる史料は残念ながら見当たらない。ただ，イギリスからインド，さらに後に述べるように，中国，日本と移り住んだブラックには，フリーメイソンのコスモポリタン的な理念がいかにもふさわしいように思える。

さて，フリーメイソン・ブラックの履歴を追ってきた最後に，その履歴を通じて明らかになる彼の「動き」を再度確認しておこう。

1862年には，ブラックはまだオーストラリアにいたと思われる。その後，インドに渡る。この時期は，1863年前半と考えられる。ベネットによると，インドにおけるフリーメイソン・ブラックの履歴はこの年いっぱい確認できるという[20]。では，ブラックはいつ日本にやってきたのか。節を改めて，この点を追究したい。

２　来日までの日々――中国のジョン・レディ・ブラック

ブラックに関するまとまった文献としてはもっとも古い太田原在文『十大先覚記者伝』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社，1926年）には，ブラックの来日時期に関する記述はない。オーストラリアで「商業にも失敗したので，帰英せんとて途中日本へ立ち寄つたのであるが，日本の風土と日本人とが大層気に入つたところから，彼は余生を日本で送ることを決心した」[21]とだけしか書かれていない。

先にブラックが1862年にはまだオーストラリアに在住していたことを示す根拠として『ヤング・

ジャパン』の記述を引いた。そのすぐ後に，ブラックは次のように書いている。

> 当時の私は，この国[日本]を訪れることなどは，月世界の人間とつき合うことと同然，考えてもみなかった。この新しい友人が何を話してくれても，そこに行きたいという特別な希望はわかなかった。というのは，当時，私の考えは全く別の方向に向いていたからだ。しかし，彼は日本訪問ですっかり魅了されていたので，その国と国民についての話しぶりには，熱狂的なところがあって，興をそえるものがあった[22]。（傍点，引用者。以下同様）

日本から戻ったばかりの人物が熱狂的に語る「日本の魅力」を聞いても，ブラックは特別に日本に行きたいとは思わなかったのである。ブラックが考えていた「全く別の方向」とは，おそらくインドに渡り，歌手活動を行うことだっただろう。すでに18世紀後半以降，イギリス東インド会社の植民地状態になっていたインドは，1858年，インド統治法によってイギリスの間接統治体制となる。同年にはムガル帝国も滅亡した。ブラックはオーストラリアにあって，こうしたインドの新しい動向を耳にしただろう。かつてロンドンにあってオーストラリアに新天地を求めたように，インドが新しい希望の地に見えたのではないか。イギリス人の数も急速に増えていたはずだ。そうした人々を相手にした歌手活動によって，ある程度の資産を得た後，故国イギリスに戻ろうと考えていたのではないだろうか。ただし，このとき聞いた「日本のこと」は，話し手が熱狂していたこともあって，ブラックの記憶に残ることになったのである。

この記述の後，ブラックは来日の理由については，「いろいろの事情のために」としか書いていないのだが，続く部分に彼の来日時期を推測する重要な記述がある。

> 私がすでに結論を述べたあの悲しいエピソードがちょうど終ったところであった。薩摩との和解は，満足すべき大詰めに達した。こういう時に，私は到着したが，永住しようなどとは考えもしないで，立ち寄ったのだった[23]。

「薩摩との和解」とあることから，「あの悲しいエピソード」が，生麦事件であることが分かる。生麦事件は，文久２年８月21日（1862年９月14日），現在の横浜市鶴見区生麦の東海道で起きた。江戸から薩摩に戻る途中の薩摩藩主の父島津久光の行列と乗馬を楽しんでいたイギリス人男性３人と女性１人の計４人が遭遇し，下馬しなかったことを理由に薩摩藩士によって１人が殺害され，２人が重傷を負わされた事件である。

ブラックはこの事件とその直後の状況を『ヤング・ジャパン』に詳述している[24]。その筆致はいかにもジャーナリストらしく，『ジャパン・ヘラルド *The Japan Herald*』に載った関係者の証言などをもとにした客観的な叙述で，実にくわしい。『ジャパン・ヘラルド』は横浜で発行されていた英字紙で，やがてブラックは編集人・経営者として，深くかかわることになる。事件は横浜の居留民社会にも衝撃を与え，事件が起きた当日夜十時から緊急の居留民集会が開かれた。この模様と決

議の内容にも，ブラックは多くのページを割いている。

事件は外交問題に発展し，ついには翌文久３年７月２日（1863年８月15日），イギリス艦隊７隻が鹿児島湾で薩摩藩と交戦する薩英戦争（鹿児島戦争）に至る。ブラックは薩英戦争に至る経過，戦闘の模様，その後のイギリスと幕府，薩摩との交渉についてもくわしく記している。戦後の薩摩藩とイギリス側との交渉は，文久３年11月１日（1863年12月11日），妥結する。薩摩藩が幕府に借金し，この日，横浜のイギリス公使館で2万5000ポンド（10万ドル）に相当する６万300両をイギリス側に支払って講和が成立したのである 。『ヤング・ジャパン』は，「条件は，予想できたとおり，満足すべきものだった」[26]と記して，講和文書の全文を収録している。

以上，「あの悲しいエピソード」の経過と結末をたどった。改めて確認しておくと，ブラックは「薩摩との和解」が「満足すべき大詰めに達した」時期に来日した，と自身で記していた。この邦訳の「満足すべき大詰めに達した」という訳語はいくぶん紛らわしい。この部分の原文は，brought to a satisfactory climax[27]である。「大詰め」という表現だと，最終的な結末以前という印象があるが，climax はそのまま「頂点（＝調印）」と解すべきだろう。要するに，ブラック自身が来日時期に直接ふれた唯一の記述によれば，彼の来日は文久３年11月１日（1863年12月11日）以降ということが確認できる。この記述を根拠にブラックの来日時期を「文久３年（1863年）末」とするのが，今日ではほぼ通説と言っていいようだ[28]。

しかし，先に記したように，ベネットによると，インドにおけるフリーメイソン・ブラックの履歴は1863年いっぱい確認できるという。だとすると，ブラックの来日は文久4年（1864年）に入ってからのことになる。むろん，文久４年早々にインドを引き上げ，すぐに来日したとすれば，『ヤング・ジャパン』の記述とそれほど矛盾しないかもしれない。ブラックは当然，西暦で思考しているわけだから，薩英間の講和調印の1863年12月11日は年明けまで20日しかない。

だが，ことはそう簡単ではない。ブラックの足跡はインドから直接日本には伸びてはいない。1864年に入った後もブラックが香港や上海に滞在していたことを示す史料があるからだ。

フリーメイソン・ブラックの履歴を明らかにしたベネットは，この時期のブラックの足跡も追っている[29]。インドを後にしたブラックは，1864年４月１日の *Overland China Mail* によると，同年３月25日，香港を訪れている。4月29日の同紙の付録 supplement には，ブラックの公演に関する記事も掲載された。４月14日，18日に *Evening Mail* に掲載された記事を転載したもので，それぞれの掲載前日行われたブラックの公演の批評である。記事はブラックが歌った歌を一つ一つあげて，彼の歌唱の絶妙な技量を絶賛している。5月13日の *Overland China Mail* 付録にも，同じように *Evening Mail* の５月２日，４日に掲載された同様の公演評が載っている。この記事には，４月29日，５月13日とも「EVENINGS AT HOME」という見出しがついており，ブラックは，このタイトルの連続公演を少なくとも４月13日，17日，５月１日，５月３日の合計４回，香港で行ったことになる。

これらの批評からブラックの公演スタイルをうかがい知ることができる。タイトルのようにアット・ホームな雰囲気の中で故郷のスコットランドの歌をはじめ，各地の歌を情緒豊かに歌うブラッ

クの魅力に加えて，評者は歌の合間に彼がはさむ語り narrative や小話 anecdote の卓抜さも指摘している。快楽亭ブラックとして明治の日本で活躍したブラックの長男ヘンリー・ジェームズは父親のこうした才能を受け継いだのだろう。

ヘンリー・ジェームズと言えば，この時期，ブラックの家族はどうしていたのだろうか。前稿に記したように，妻エリザベス・シャーロットを伴って南オーストラリア・アデレードに移住したブラックは，1856年８月29日，長女アニーを得るが，彼女は翌57年１月11日に死亡する。長男ヘンリー・ジェームズは1858年12月22日に生まれた[30]。妻と長男は，ブラック来日後，元治２年９月20日（1865年11月８日），上海からの船で横浜に到着したことが知られている[31]。つまりオーストラリアから日本に至る間のいつの時点かで，ブラックは妻と長男と別れ，２人をおそらくは先にイギリスに帰国させていたらしい[32]。

先にブラックのインド行きは，歌手活動によってイギリスに戻る前にある程度の資金を得ることが目的だったのではないかと推測した。この点について，ベネットも「ブラックは自身の財政状況を改善するためにインドでのコンサート・シリーズを企画したのだろう。妻子をイギリスに残して，中国へ行くことを決めたことから分かるように，[このシリーズで]かなりの手ごたえを得たのだろう」[33]と書いている。いわば資金稼ぎのための「出稼ぎツアー」だったと言えるかもしれない。インド行きがすでにブラック単身だったがどうかは不明だが，インドまでは妻子を伴い，同地での興行の成功によって得た金で妻子をイギリスに戻し，さらに香港，中国本土への「出稼ぎツアー」に単身で向かったと考えるのが穏当なところだろう。

香港で連続公演を持った後，ブラックは上海に渡る。ベネットが博捜した新聞史料によると，ブラックの上海到着は1864年５月13日である。上海でも公演を行い，この時期の *North China Herald* には，彼の公演を熱狂的に称賛した批評が載った。

さらに，*North China Herald* の６月18日紙面には，ブラックが漢口 Hankow に公演旅行に出る意向を持っていることを惜しむ記事が出た。漢口は中国湖北省武漢 Wohan の北部地区で，長江と漢水との合流点の北岸に位置する交通の要衝である。実際にブラックが漢口への公演旅行に出たかどうかは明らかではないが，ブラックの足跡がようやく日本に伸びたことが確認できるのは，この後である。

日本におけるブラックの足跡が確認できるのは，すぐ後に述べるように横浜である。だが，最初に日本に上陸したのは，横浜ではなく長崎だっただろう。『ヤング・ジャパン』に，彼は「個人的思い出」として，「私が日本に着いて間もなく，私は友人の家で，主君の用事で来ていた一人の役人に会った」際の「日本刀」にかかわるエピソードを記している[34]。その締めくくりには「この話は，鹿児島戦争直後，長崎でのことで，彼は薩摩藩の役人だった」とある。ブラックは長崎で日本の風土との初めての出会いを経験しただろう。ブラックより少し前，彼と同じ経験をした１人の外国人は，次のように記している。

［……］長崎湾は伊王島のあたりから，奥へ大きく盥（たらい）形をなし，その周りは，殆ど残らず急峻な山で取

り囲まれて，その山々は，水際から頂上まで，家やお寺や，或は砲台が立ち列び，一面に目醒めるばかりの青々とした樹木や，垣根あるいは小さな畠に取り囲まれている。［……］誰でも海旅の後には，ちょっとした事にも感嘆し易いものであるが，そうした気持ち以外に，実際長崎入港の際，眼前に展開する景色ほど美しいものは，またとこの世界にあるまいと断言しても，あながち過褒ではあるまい[35]。

長崎湾に入る船上で，ブラックもこうした光景を見たに相違ない。そのとき，彼の頭の中に1862年，オーストラリア・バララットで出会った人が熱狂的に語った「日本の魅力」がよみがえってきていたかもしれない。

ようやく私たちはブラックの来日時期について検討する段階までたどり着いた。節を改める前にここまでの記述を整理しておこう。従来，ブラックの来日時期に関する定説は，『ヤング・ジャパン』の生麦事件に関する記述をもとに「1863年（文久３年）末」だった。だが，オーストラリアを後にしたブラックは1863年中，インドで歌手としてコンサート活動を行い，さらに1864年５月まで，香港，上海とコンサート活動を行っていることが分かった。オーストラリアでの歌手活動が最初に確認できるのは，1858年７月だった[36]。「歌手ブラック」は従来の想像[37]をはるかに超えて長く，しかも広範な地域で本格的に活動していたのである。

３　「歌手ブラック」の終わり――横浜のジョン・レディ・ブラック

文久4年（1864年）は２月20日に改元して元治元年となる。元治元年６月27日（1864年７月30日）の『ジャパン・ヘラルド』付録（④93ページ）にブラックが登場する。記事は７月28日に行われた横浜におけるブラックの最初のコンサートを，例によって絶賛した内容である。日本に現れたのはいまだ「歌手ブラック」としてであった。

なぜブラックは日本にやってきたのか。その理由は明らかではない。だが，先に『ヤング・ジャパン』の記述を引いたように，「永住しようなどと考えもしないで，立ち寄った」[38]ことだけはたしかである。これまで述べてきたように，インド，香港，上海での「歌手ブラック」の公演は，新聞記事を見る限り，成功しているといっていい。当時，上海と長崎，横浜との貨客船の往来はすでにかなりひんぱんである。たとえば，横浜については『ジャパン・ヘラルド』1965年６月24日紙面（⑤218ページ）に掲載されている船舶統計によると，1864年中に横浜には入港した外国船は合計延べ174隻に上る。イギリス船が圧倒的に多く延べ139隻。このうち延べ96隻の出航地は上海である。香港と上海で歌手としての公演に成功を収めたブラックが，次の「出稼ぎ先」として横浜を選んだとしても不思議ではない。歌手としての「出稼ぎ先」だったとすれば，永住が念頭になかったのは当然である。

「歌手ブラック」は，横浜において活発な公演活動を行った。その状況の一部は『ジャパン・ヘラルド』の紙面からうかがうことができる。８月27日（④123ページ），９月３日（同143ページ），10日（同162ページ），17日（同186ページ）の４回，それぞれ２，３日前の夜８時半から行われる

公演の広告が大きく掲載されている。「EVENINGS AT HOME 」という公演タイトルは，これまで香港や上海で行われてきたものと同じ。公演場所は，いずれもブラックの住居（居留地53番）に隣接した godown（倉庫）となっている。入場料は指定席 3 ドル，自由席 2 ドルである。

タイトルは同じだが，内容は香港や上海のものと違う。日本人の手品師 conjuror や奇術師 juggler らがゲスト出演している。居留地在住の外国人の興味を引くように考えられたプログラムだろう。内容は少し違うが，日本人の出演者は同じ顔ぶれである。紙面の表記をそのまま引けば，「NAMINGOROO」と彼の息子と娘，「ASA KICHI SAN」の計 4 人である。前者は，隅田川浪五郎，後者はアサキチ（漢字表記は不明）と思われる。演目は「BUTTERFLY TRICK」と書かれている。紙を細かく切って扇子であおぎ，蝶が舞っているように見せる「胡蝶の舞」の名で知られる芸である。

隅田川浪五郎は，天保元年（1830年），江戸生まれ。「胡蝶の舞」の名手として知られた。慶応２年（1866年），アメリカの興行師の招きで，他の曲芸師らと「日本帝国一座」を組んでアメリカからヨーロッパを興行して回り，各地で「胡蝶の舞」を演じ，評判になった。後には，三遊亭遊成の名で寄席へ出演したという。アサキチはやはり「胡蝶の舞」の名手として知られ，ヨーロッパでも公演した[39]。ブラックが来日当初からこうした人々と交流があったことは，長男ヘンリー・ジェームズが後に快楽亭ブラックとして日本の寄席で活躍したことと考え合わせると興味深い。

ところで，これらの『ジャパン・ヘラルド』の広告では，名前がすべて「JOHN RODERICK BLACK」となっている。John Reddie Black とは別人の「ジョン・R. ブラック」なのだろうか。いや，この公演の主は，まちがいなく私たちが追ってきた「歌手ブラック」その人である。公演のタイトルがオーストラリア以来とまったく同じ「EVENINGS AT HOME」であることや，歌われている歌にオーストラリアでの公演以来，「歌手ブラック」が歌ってきた歌が含まれていることから，この点には疑問の余地はない[40]。なぜ，RODERICK になっているのかは不明である。もし間違いであれば，英字紙だからブラックが見逃すはずはない。この時期，ブラック自身が，このように名乗っていたのだろうか。

９月に横浜で日本人芸人と一緒の公演したブラックは，しかしこのときはいったん横浜を離れたようだ。公演の広告が掲載された日と同じ1864年９月17日の『ジャパン・ヘラルド』付録（④188ページ）に「Mr.Black’s Benefit」というタイトルの記事が載っている。19日の公演に関連して書かれたもので，「まもなく横浜を離れるというブラック氏による公表は，多くの人から大変残念なこととして受け取られることになろう。なぜなら，彼の楽しさあふれる芸はたびたび私たちを“くつろいだ気持ち（アット ホーム）”にしてくれたので，私たちは彼のいない外国（アブロード）にいることを強く感じるにちがいないからだ」と，ブラックの公演タイトルに引っ掛けて，彼がこの日の公演を最後に横浜を去ることを報じている。

ブラックの出航先はおそらく上海だっただろう。しかし，長く上海のとどまることはなかったようだ。『ジャパン・ヘラルド』11月12日の「PASSENNGERS」欄（④266ページ）に上海から到着したコリー号 Corea の乗客として「ブラック氏」が載っている。同日１面の「船舶情報」（同264ページ）によると，コリー号の横浜到着は11月８日である。その後のブラックの身上の展開から

考えて，この「ブラック氏」はジョン・レディ・ブラックと考えていいだろう。「歌手ブラック」として横浜で何度かの公演を行った後，上海に帰ったブラックは２カ月足らずで横浜に戻ってきたと思われる。

ブラックの横浜再入国の３日前になる11月５日の『ジャパン・ヘラルド』（④257ページ）にブラックの人生の新しい展開を教えてくれる短い告知が載っている。『ジャパン・ヘラルド』の経営者であり，横浜で競売事業も手広く営んでいた「A.W.ハンサード Hansard」による11月３日付けのもので，直訳を試みると，以下のような内容である。

> 競売業者としての私の事業に関するJ. R. ブラック氏との提携協議が進んでおり，前記事業はさらなる告知が行われるまで，ブラック氏と私自身と共同で経営される。

要するに，まだ正式契約には至っていないが，ハンサードが従来個人で行っていた競売業をブラックと共同経営で行うことになったという事前の告知である。続いて11月12日の『ジャパン・ヘラルド』（④265ページ）に同じ「A. W. ハンサード」名で告知が出た。競売事業を「Hansard & Co.」というかたちとタイトルで行うことと，追加の告知があるまで，J. R. ブラック氏が代理人として会社を経営するという内容である。

ブラックは上海から横浜に戻ったのが11月初旬であることを考えると，この２つの告知は実に素早い。いや，素早すぎるというべきだろう。私は，この間の成り行きを次のように考える。

ブラックが初めて横浜を訪れ，コンサート活動を始めたのは元治元年（1864年）６月以降である。その後，早い段階で，ハンサードはブラックと懇意になっただろう。そして，ブラックの商売に関する識見を知ったハンサードは，自身の競売事業の共同経営者になってくれるようブラックに依頼するに至った。

「歌手ブラック」としての日々はそれなりに「実入り」はよかったかもしれない。だが，かつてオーストラリアで実業家として成功した経験を持ち，フリーメイソンとしての矜持もあったはずのブラックにとって，やはり「浮き草稼業」というべき歌手の仕事は，「何か違う」と考えることも多かっただろう。そんなときに，ハンサードから誘いがかかった。彼は「歌手ブラック」の足を洗うことを決心した。短い上海行きは同地での仕事にけりをつけるためのものだっただろう。そして，ハンサードはブラックが横浜に戻る時期に合わせて，２つの告知を自身の経営する新聞に相次いで掲載することになった。

４　英字紙編集者として――ハンサードとの出会い

ジョン・レディ・ブラックを「近代日本のジャーナリズムの父」と呼ぶとしたら，A. W. ハンサード Albert William Hansard は「近代日本の新聞経営の父」というべきかもしれない。ブラックとは違う意味で，近代日本のジャーナリズム史に大きな足跡を残した人である。ハンサードに関して

は，鈴木雄雅による資料探求の過程を詳述した研究がある[41]。以下，主にこの研究に拠りつつ，ハンサードについてごく簡単に記しておく。

ハンサードは，『英国議会報 *Parliamentary Debates*』に冠名を残す印刷業ハンサード家の出身である。創業者ルーク・ハンサード Luke Hansard（1752～1828）の孫として，1821年１月22日，ロンドンで生まれた。ロンドンで印刷業の修業を経て，1849年にニュージーランド・オークランドに渡り，不動産業などを行っていた。来日時期は分からないが，文久元年５月15日（1861年６月22日），長崎で英字紙『ナガサキ・シッピング・リスト・アンド・アドヴァタイダー *The Nagasaki Shipping List and Advertiser*』を創刊した。英字紙であるが，日本における本格的な新聞の嚆矢とされる。8月27日まで週２回28号まで刊行された。

この後，ハンサードは，江戸に近いこともあって居留地として長崎をすでに凌駕していた新興の港町・横浜に移り，11月23日，毎週土曜日刊行の週刊新聞『ジャパン・ヘラルド』を創刊する。その一方，前述のように競売事業を展開した。

こうしたハンサードの履歴から，彼がブラックと短い間に懇意になり，競売事業の共同経営を持ちかけた理由を容易に推測できるだろう。名門ハンサード家に生まれながら，ハンサードは若くしてニュージーランドに移住した。その地でかなりの成功を収めた。鈴木の調査によると，彼は，「オークランド土地協会」事務局長のほか，「オークランド捕鯨会社」「ニュージーランド保険会社」の役員に就任している。「Auckland Mechanics Institute」[42]では，「印刷史・印刷実学」の講師を務め，事務局長にも就任している。1851年５月27日，オークランドで開かれたヴィクトリア女王の誕生祝賀会に出席していることも確認されている[43]。

ブラックは英国海軍 The Royal Navy 士官を輩出したスコットランドの名望家の家に生まれながら，オーストラリアに移住する。その地でいったんは実業家としてかなりの成功を収めた[44]。ブラックとハンサードの履歴は相当に「似た部分」があるというべきだろう。貴族ではないものの，ともに出自は高い。若くして同じ南半球のイギリス植民地に新天地を求めた。ハンサードがニュージーランドを出て日本に来た理由は不明だが，1860年８月に不動産の売却処分を現地紙に広告していることから，やはり事業で何らかの挫折があったことが推測できる。新天地での成功と挫折，日本への渡航という点でも２人の履歴は相似形である。

故国イギリスを遠く離れた極東の地にあって，共通の体験を持つ２人はすぐに意気投合しただろう。ハンサードは５歳年少の新しい友人と短期間の間に信頼関係を築いたに違いない。

競売事業は居留地にあって重要なビジネスだった。現在では，競売 auction と聞くと，美術品・骨董品や財産処分にかかわることにように思えるが，種々の輸入品の販売ルートが確立していなかったこの時代，競売事業は要するに輸入品の販売を行う「商社」的な存在として，居留地における経済的プレゼンスは高かった。ハンサードは『ジャパン・ヘラルド』に毎号，いくつも「競売」の広告を掲載しており，横浜居留地における有力な競売事業者の１人だったことがうかがえる。ハンサードの競売事業の共同経営者になったブラックは，日本（横浜）とのかかわりを一気に深めることになった。

とはいえ，ブラックはいきなり『ジャパン・ヘラルド』に関係したわけではなかった。先に紹介した２つの告知はあくまでもハンサードの競売事業の共同経営に関するものだった。ブラックが競売事業だけでなく，『ジャパン・ヘラルド』の共同経営者として姿を見せるのは，元治２年４月５日（1865年４月29日）である。

この日，同紙にハンサード名で「共同経営告知 CORPARNERY NOTICE」というタイトルの広告（⑤144ページ）が初めて載った。４月26日をもって「ジョン・レディ・ブラック氏」が，『ジャパン・ヘラルド』の新聞発行事業とそれに付随する印刷事業の共同経営者になることを承認したという内容で，同日から彼が『ジャパン・ヘラルド』の編集責任者になることも明記され，さらに社名を「Hansard & Black」とすることが告知されている。これを受けて，『ジャパン・ヘラルド』の次号５月６日（⑤153ページ）の末尾には，次のように表示された。

Edited ,Printed , Published by the Proprietor ,Hansard& Black, Yokohama, Japan.

「Hansard & Black」の部分は，前号まで「Albert W. Hansard」だった。ジョン・レディ・ブラックは，ようやく「新聞」の世界にその名を現すことになったのである。

ところで，イギリスにいたときはもちろんオーストラリアに住んでいた時期についても，ブラックが「新聞」にかかわったことを示す史料は知られていない。ブラックがイギリスでクライスツ・ホスピタルに在学していた事実は，前稿で確実な史料的裏づけをもって明らかにした[45]。その際，依拠した文献は，ロンドンのギルドホール図書館で見出したAlpabertical register of Children at Christ's Hospital, Hertford, with date of birth and date of entry to the school, compiled 1815-1902[46]である。ジョン・レディ・ブラックは1833年６月21日にクライスツ・ホスピタルに入学していた。ここでふたたび詳述することは避けるが，生年月日の一致から名簿に載っているジョン・レディ・ブラックは本人に間違いない。

しかし，前稿を執筆した段階ではブラックがクライスツ・ホスピタルを退学した時期に関しては，クライスツ・ホスピタル・ミュージアムの学芸員から得た伝聞しかなかった。その後，ふたたびギルドホール図書館でマイクロフィルムを探索した結果，いくつかの新しい史料を見つけることができた。その詳細については本稿の射程以前のことであり，ここでは割愛するが，ブラックは満15歳の誕生日である1841年１月８日，クライスツ・ホスピタルを退学している。しかし，故郷のスコットランドには戻らなかったようだ。ブラックの父親は彼の身をそのまま「雇用主 Master」にゆだねている。

これも前稿でふれたことだが，イングランドの1851年センサスによって，ジョン・レディ・ブラックの存在を知ることができる。25歳のブラックの職業は「Merchant and General Agent」と記されていた[47]。15歳でクライスツ・ホスピタルを退学して10年，この時期にはブラックは修業期間を終えて一本立ちしていたのである。だが，その仕事は「新聞」とは関係はない。

オーストラリア移住後，「Black & Wright 社」を立ち上げて行った仕事も，既述のように，「新

聞」とはかわわりない貿易，船舶代理店，保険代行などの事業だった。ハンサードが競売事業のパートナーとしてブラックに白羽の矢を立てた理由は，これらの「実務経験」にあったとしても，やはり「新聞」には関係していない。

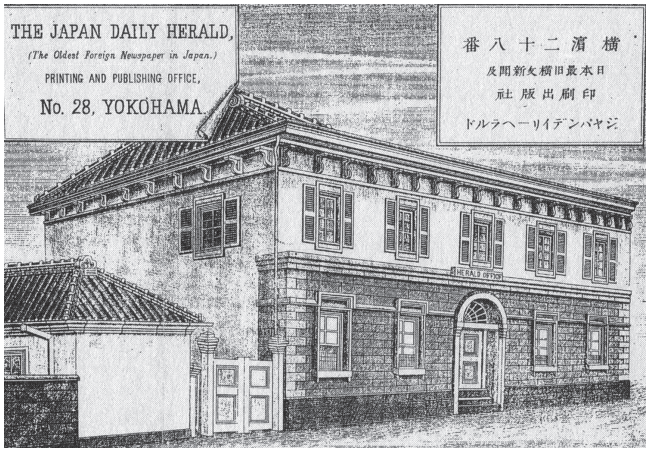
とはいえ，新聞先進国のイギリスで育ち，オーストラリア・アデレードで事業を行っていたブラックである。幕末の日本人と違って「新聞」はごく身近なものだったはずだ。ブラックがアデレードに在住していた時期，同地には *Register* と *The Southern Australian Advertiser* という2つの有力日刊紙があった。とりわけ *Register* は地域社会に大きな影響力を持った新聞で，ある研究者は「一つの地域における影響力の強さという点では，アデレードにおける *Register* は *The Times* もかなわないといっていいだろう。しかも単に世論 public opinion を反映していただけでなく，かなりの程度，それをリードしていた」と評している[48]。ブラックは，こうした社会に生きていたのである。

一方，ハンサードは先に述べたように，イギリスにおける印刷業の名門ハンサード家の出身である。イギリスでも移住先のニュージーランドでも直接，新聞の編集や経営にかかわったことはなかったようだが，印刷業の修業をしていたことは確かである。印刷業は新聞発行の仕事と「兄弟」のような関係といっていい。ハンサードは社会における「新聞」の役割を熟知していたに違いない。この点で，『ジャパン・ヘラルド』創刊号（①276～277ページ）に掲載された記事はまことに興味深い。『ナガサキ・シッピング・リスト・アンド・アドヴァタイザー』から受け継いだ発刊の趣旨，具体的な紙面の内容などを述べた長文のもので，ハンサードがどのような理念を持って日本で新聞発行を始めたかがよく分かる。

『ジャパン・ヘラルド』は，「日本のための新聞 A JOURNAL FOR JAPAN 」（以下，大文字アルファベットは原文のまま）であり，「新聞が導かれる原理 PRINCIPLES は，端的に言って最も徹底した独立most THOROUGH INDEPENDENCE である」と言論の自由を高らかにうたう。むろん，そこには「政府の影響力からの自由」が含まれる。政府当局は統制の力を行使しようとするが，われわれはそれに屈してはならないし，「新聞は，できるだけ早い時点で，われわれが手に入れられる，すべての公共的に重要なものごとに関する情報とそれらに関する公正かつ開かれた議論を，節度と一貫性を持った論調で伝える仲介者になることをめざす」のである。

まことに格調高く，正当な「ジャーナリズム論」である。ハンサードの競売事業の共同経営者になった後，ブラックはおそらく『ジャパン・ヘラルド』の編集にも関与しただろう。そこには，見事な「ジャーナリズム」感覚を持った人物がいた。ハンサードのもとで「新聞」にかかわったことは，ブラックのその後の人生を決めることになった。晴れて『ジャパン・ヘラルド』の編集責任者となったとき，ブラックは自分の人生の方向が「新聞」にあることを確信したに違いない。

こうした確信が妻子呼び寄せにつながったのだろう。妻エリザベス・シャーロットと長男ヘンリー・ジェームズが来日するのは，すでに述べたように元治2年9月20日（1865年11月8日）である。ブラックが正式に『ジャパン・ヘラルド』の編集責任者・共同経営者になったのは，これに先立つほぼ5カ月前。この時期にイギリスにいる妻子に日本に来るよう連絡したとすると，ちょうど来日時期が符合する。



ジャパン・ヘラルド社
『日本絵入商人録』(1886年）より

ブラックを編集責任者・共同経営者にしたハンサードは，そのわずか３カ月後の慶応元年閏５月16日（1865年７月８日），日本を離れ，イギリスに帰国する。ハンサードの帰国の理由は分からない。しかし，彼の帰国後も長く『ジャパン・ヘラルド』『デイリー・ジャパン・ヘラルド』の「編集・発行人」は「Hansard & Black」のままだったし，競売事業も「Hansard & Co.」の名前で行われている。ハンサードは信頼できるパートナーを得てイギリスに戻ったが，また日本に戻ってくるつもりだったのではないか。だが，彼は日本に戻ることなく，翌年５月５日，ロンドンで死去する。

そして，『ジャパン・ヘラルド』をハンサードから受け継いだブラックは，ここでまたまた挫折を味わうことになる。ブラックの人生はいつになっても「順風」は吹かないのだった。

5　再度の挫折を超えて――操觚者ブラックの出発

この時期，居留地横浜では，英字紙は厳しい競争を繰り広げていた[49]。文久３年３月26日（1863年５月13日），F.ダ・ローザ F. da Roza[50]が『ジャパン・ヘラルド』と同じ週刊の『ジャパン・コマーシャル・ニュース*The Japan Commercial News*』を創刊する。『ジャパン・コマーシャル・ニュース』が慶応元年４月30日（1865年５月24日），通算107号をもって終刊した後，発行の権利・印刷機械一式を受け継いだチャールズ・D. リッカビィCharles D. Rickerby[51]が，慶応元年７月19日（1865年９月８日），『ジャパン・タイムズ*The Japan Times*』を創刊した。同紙は『ジャパン・ヘラルド』と同じ週刊だったが，５日後には日刊の『ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァタイザー*The Japan Times' Daily Advertiser*』さらに同月末にはほぼ隔週刊の『ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル*The Japan Times' Overland Mail*』も刊行された。

一方，『ジャパン・ヘラルド』は，すでに文久３年９月14日（1863年10月26日），日刊の『デイリー・ジャパン・ヘラルド *The Daily Japan Herald*』を創刊していた。同紙は広告が主体で，１月の購読料２ドルとなっているが，実際には週刊の『ジャパン・ヘラルド』購読者向けに無代で配られたようだ。しかし，こうしたスタイルの英字紙とはいえ，同紙は近代日本における最初の「日刊新聞」ということになる。

『ジャパン・コマーシャル・ニュース』が終刊した後，ごく短期間は『ジャパン・ヘラルド』が“一人天下”だった。だが，先に述べたように，1865年になって『ジャパン・タイムズ』が日刊・週刊・隔週刊のラインナップで，ここに挑んだのである。当時の居留地横浜の人口は約500人に過ぎなった[52]。各国の駐留軍隊がかなりいたことは確かだが，いずれにしろごく限られた購読者を相手に『ジャパン・ヘラルド』と『ジャパン・タイムズ』が競合することになった。『ジャパン・ヘラルド』は１部75セント，先払い年間購読料は25ドル。『ジャパン・タイムズ』は１月２ドル。値段は拮抗し，紙面的にも両者遜色がない。

『ジャパン・ヘラルド』を見ると，当初4ページ建てだったが，やがて「付録」というかたちで増ページし，６ページや８ページにもなった。１面は横浜港の「船舶情報」とマーケット情報や保険その他の広告で埋まる。題字下で各国領事館の公告掲載紙であることを大きくうたっているのが目立つ。これは，最終的にはイギリス，フランス，オランダ，プロシャ，ポルトガル，スイスの計６カ国になる。補助金等があったのだろう。各種広告も多いが，日本国内の「政局」から国際記事まで，かなりの「ニュース」が掲載されている。

こうした記事，とりわけ日本国内の「政局」に関する記事は今後改めて検討したいと考えているが，本稿では先を急ぐ。『ジャパン・ヘラルド』の有料部数がどれぐらいあったか不明だが，『ジャパン・タイムズ』と競合する中，とても販売収入だけでは採算は合わなかっただろう。広告収入や印刷業，競売事業の収入などで補っていたはずだ。週刊以外に発行していた日刊紙も負担だっただろう。慶応３年５月（1867年６月）ごろ，ハンサードから経営を引き継いで約２年，ブラックは破産してしまう。

この時期の新聞史料は『デイリー・ジャパン・ヘラルド』しかないこともあって，経過はよく分からない。『デイリー・ジャパン・ヘラルド』1867年６月18日紙面（⑪283ページ）に，アレクザンダー・マッケニー Alexander McKecnie なる人物が６月11日に行った破産申し立てに伴って，６月25日午前10時から裁判所で最初の債権者集会を開くとのイギリス領事名の公告が載った。マッケニーは「McKecnie& Co.」を経営する衣料品商で，一時はかなり手広く事業を展開していたようで，しばしば英字紙に大きな広告を出している。

このマッケニーの破産は実はブラックの破産と連動していたのである。11月12日に行われたブラックとマッケニーの破産に関する最終審問についての記事が *The London and China Telegraph* 慶応３年11月２日（1867年11月27日）紙面[53]に載っている。マッケニーとブラックにそれぞれ下された判決の抄録を読むと，ブラックとマッケニーはある時期，共同で商品を販売する事業を行ったが，まったく利益を生まずに失敗に終ったらしい。

共同事業はブラックが持ちかけたようだ。ブラックは，これもハンサードから受け継いでいた競売事業の分野で利益拡大をはかったのだろう。判決は，ブラックの破産取り消しを２年間延期するというものだ。マッケニーはブラックに持ちかけられた話に乗っただけということなどから情状酌量され，破産取り消しまでの期間は１年間とされた。

くわしい状況は分からないが，判決を読むと，ブラックは３年間にわたってまったく利益が出て

いなかったにもかかわらず，マッケニーにそうした事情を説明しないまま共同経営の契約を結んだという。しかし，どうもブラックがマッケニーなる人物をだましたということでもないようだ。ブラックはマッケニーが相当の資産を持っていると考えていたのだが，実際には彼には全く資産はなかったということらしい。彼を引き込むことで経営を再建しようとした目論見がつぶれてしまった結果の破産だったのだろう。

この破産宣告以前に，すでにブラックは『ジャパン・ヘラルド』の経営から降りている。現存する『デイリー・ジャパン・ヘラルド』を見ると，前日まで「編集・発行人」として出ていた「Hansard & Black」が慶応３年５月３日（1867年６月３日）付け新聞から消えている。先の記事によると，『ジャパン・ヘラルド』は創業者の故ハンサードの子供たちの資金によって，いまは故ハンサードの義理の息子が経営しているとある。この人物は，アルフレッド・トーマス・ワトキンス Alfred Tomas Watkins で，彼は慶応３年６月（1867年７月）に来日している[54]。

破産に伴って，「Hansard & Black」の資産は競売に付されることになる。しかし，判決を待っていたためか，７月17日の『デイリー・ジャパン・ヘラルド』（⑫54ページ）には，競売を８月１日に延期する告知が出た。これを見ると，タイプ機，印刷機などすべての資産のほか，『ジャパン・ヘラルド』の営業権も競売の対象になっている。『ジャパン・ヘラルド』については「現在年間12000ドルの純益がある」と記されている。８月１日の競売もまた延期になっていて，実際に競売がいつ行われたのかは確認できない。

ブラックはオーストラリアでも事業に失敗した。再度の破綻である。しかし，すでに燃え出していた「新聞」に対する彼の情熱は消えることはなかった。創業者ハンサードの子孫によって『ジャパン・ヘラルド』を追われるかたちになったブラックだが，慶応３年９月15日（1867年10月12日），日刊夕刊英字紙『ジャパン・ガゼット』を創刊する。ワトキンスに『ジャパン・ヘラルド』の経営権を譲って間もない時期のことだろう。資金はどうしたのか不明だが，競売の結果，ある程度の資金を手に入れたのかもしれない。

『ジャパン・ガゼット』の内容についても本稿ではふれられないが，ブラックは後に『ジャパン・ガゼット』の創刊について，「時事ニューズを日刊新聞で提供しようという，横浜における最初の試み」[55]と誇らしく記している。むろん，この表現は厳密には正しくない。だが，人生を振り返って，ブラックはこうした確かな思いを持ったのだろう。

ここに「操觚者ブラック」が出発した。『ジャパン・ガゼット』創刊から約１月後，徳川慶喜は大政奉還を行う。歴史が音を立てて動き始めていた。『日新真事誌』が創刊されるのは，この４年半後のことである。

ジョン・レディ・ブラック　略年譜

1826. 1 . 8	**ジョン・レディ・ブラック生まれる**
1829. 4 .23	エリザベス・シャーロット・ベンウェル生まれる
1830. 5 . 3	兄ジェームズ・ハーディス，クラシスツ・ホスピタルに入る
1833. 2 .16	**クライスツ・ホスピタルに入る**
1836. 7 .20	兄ジェームズ・ハーディス，クライスツ・ホスピタル退学
1841. 1 . 8	**クライスツ・ホスピタル退学**
1846.12.24	母ソフィア・キフィアナ・ジュリアナ死去
1850. 8 .22	兄ジェイムズ・ハーディス，医師試験に合格
1852. 7 . 5	父，再婚
1853.11.10	**シャーロート・エリザベス･ベンウェルと結婚**
1854.10.29	**妻とともに南オーストラリア・アデレード着。「Black & Wright 社」を設立**
1856. 8 .29	長女アニー Annie 誕生
1857. 7 .23	兄ジェームズ・ハーディス，東インドで死去
1857. 1 .11	長女アニー死去
1857.11	**アデレード商業会議所の委員に選ばれる**
1858. 6 .24	**「Black & Wright 社」解散**
1858. 2 . 6	父，Commander（海軍中佐）に昇進して退役
1858. 7 ～	**資産を競売で処分。このころから歌手活動を始める**
1858.12.22	長男ヘンリー･ジェームズ（後の快楽亭ブラック）生まれる
1861.4～9	**各地で「さよなら公演」を行う**
1861. 6 .22	『ナガサキ･シッピング･リスト・アンド・アドヴァタイザー』創刊
1861.11.23	『ジャパン･ヘラルド』創刊
1862. 1 .18	父，死去
1862. 9 .14	生麦事件起きる
1863. 5 .13	『ジャパン・コマーシャル・ニュース』創刊
1863. 6 .24	**インド・シムラのフリーメイソン・ロッジに加入**
1863. 8 .15	薩英戦争（鹿児島戦争）起きる
1863. 9 .22	**インド・ムソーリのフリーメイソン・ロッジに加入**
1863.12.11	薩摩藩とイギリスの和解成立
1864. 4 ～ 5	**香港で４回の公演**
1864. 5 .13	**上海に到着**
1864. 7 .28	**横浜で初の公演**
1864. 8 ～ 9	**横浜で日本人芸人とともに連続4回公演。その後上海に。**
1864.11. 8	**上海から横浜に戻る**
1864.11.11	**A.W.ハンサードの競売事業の共同経営者になる**
1864. 4 .26	**『ジャパン・ヘラルド』の編集責任者・共同経営者，後には実質的経営者に**
1864.11. 8	妻と長男，来日
1865. 9 . 8	『ジャパン･タイムズ』創刊
1867. 6	**破産。『ジャパン・ヘラルド』を手離す**
1867.10.12	**『ジャパン・ガゼット』創刊**
1870. 5	**『ファー・イースト』創刊**
1872. 4 .24	**『日新真事誌』創刊**
1880. 6 .11	**横浜で死去**

★本文の理解に供するための暫定的な簡略版である

[1] 2論文は，「来日以前のジョン・レディ・ブラック――オーストラリア移住まで」（町田市立自由民権資料館紀要『自由民権』第24号，2011年3月）と「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック――『Black & Wright社』の発見その他」（『社会志林』第57巻第4号，2011年3月）。

[2] Kanesada Hanazono, *Journalism in Japan and its Early Pioneers*（大阪出版社，1926年）。同書の奥付には『日本の新聞と其の先駆者』という書名が表記されている。「近代日本ジャーナリズムの父」の表現は同書75ページ。

[3] 拙稿「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」参照。なお，「Black & Wright 社」の共同経営者ライトに関して，拙稿では「ともにアデレードに渡航してきただろう可能性が高い」と記した（277ページ）。ブラック夫妻が乗船していたアイリーン号 Irene の乗客名簿（*The Adelaide Times* 1854年10月30日掲載）に「Mr. Wright」とあることが，その推論の根拠だった。その後，11月1日の *The Adelaide Times* に掲載されたアイリーン号の乗客17人の名前が入った D.ブルース船長への感謝状に，「John R. Black」ともに「Richard J. Wright」があることを見つけた。この結果，ブラックと共同経営者ライトは同じアイリーン号で同時にオーストラリアに移住したことが確定した。

[4] 1857年11月3日の *South Australian Register* 掲載の記事に拠ったものだったが，前稿では理事 trustee と書いたが，商業会議所Chamber of Commerce のCommitteeのメンバーに選ばれたとするのが正しかった。商業会議所には理事という肩書きの人はおらず，President，Chairman，Vice Chairman，Secretary がいる。しかし，記事によると，出席しているCommitteeのメンバーは20人ほどだから，ブラックがこの時期，アデレード経済界でかなりの地位を占めたことは間違いない。

[5] 拙稿「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」285～288ページ。

[6]「フリーメイソン Freemason」については後の本文で簡単に説明する。正確には組織に対する呼称は「フリーメイソナリー Freemasonry」で，「フリーメイソン」は「フリーメイソナリー」会員に対する呼称とされるが，以下厳密な区別はしない。

[7] 同，288ページ。

[8] ブラックの死後，1880年にロンドンの Trubner & Co. と横浜の Kelly & Co. から全2巻として刊行された。邦訳は，『ヤング・ジャパン――横浜と江戸』全3巻（ねず・まさし，小池晴子訳，平凡社東洋文庫，1970年）。引用に際しては原文を参照したが，訳文は基本的に邦訳に従っている。

[9]『ヤング・ジャパン1』224ページ。

[10] 拙稿「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」288ページ。

[11] Terry Bennett,*Old Japanese Photographs : Collector's Data Guide,* Bernard Quaritch, 2006／*Photography of Japan 1853-1912,* Tuttle Publishing, 2006。著者ベネットは，前者に記された紹介によると，25年間にわたって19世紀の日本，中国，朝鮮の写真の収集・研究・教育を行っており，この2冊のほかにもいくつか著作がある。以下，この2冊について注記する場合，前者を Bennett A，後者をBennett B とする。

[12]『ファー・イースト』は明治3年5月1日（1870年5月30日），横浜で A Illustrated Fortnightly Newspaper として創刊された。明治6年（1873年）7月1日からは A Monthly Illustrated Journal になり，1875年8月31日号（第7巻第2号）まで刊行された。同誌はブラック研究に欠かせない対象だが，本稿では主題的には取り上げない。本格的検討は今後の課題としたい。なお，同誌の復刻版は雄松堂出版から刊行されている（所三男，金井圓編，全7巻，2007年）。

[13] Bennett B,146ページ。

[14] Bennett A, 66ページ。ブラックは，「Early Masonic Photographers in Japan」と題された部分（64～9ページ）に登場する。注記によると，ベネットは，先行研究のほか，ロンドンのフリーメイソナリー図書館・博物館から提供された日本，香港，中国におけるイギリス人会員についての手書きの名簿（1866年から1887年の間の年間報告書から作成されたという）を，自身フリーメイソンである写真家のデイヴィ

ッド・ピボディーDavid Peabodyの協力で解読，この部分を執筆した。名簿には多くの場合，会員の名前のほか，住居地，入会日時，儀礼日時，昇進日時，年齢，職業が記載されているという。言及されているのは，ブラックを含めて13人である。以下，本文でのブラックのフリーメイソンとしての履歴に関する記述は，Bennett A,66ページに基づく。

[15] フリーメイソンに関する日本語の著作は少なくないが，大半が「秘密結社」的側面を強調した「陰謀史観」めいたものである。中では，新書ながら，吉村正和『フリーメイソン――西欧神秘主義の変容』（講談社現代新書，1989年）が信頼に足る。著者は，モーツァルト（よく知られているように，モーツァルトはフリーメイソンだった）のオペラ『魔笛』などを素材に，フリーメイソンの思想を，西欧に古代から連綿と続く神秘主義と近代合理主義・啓蒙主義・科学主義との融合として位置づけている。横浜市にある極東ロッジFar East Lodge No.1 のウェブサイトが，フリーメイソンと日本におけるその歴史と現状に関する概括的な知識を与えてくれる。フリーメイソンは「世界最古，最大の友愛団体で，グランド・ロッジという制度のもとに活動しています。［……］現在世界の多くの国々にメイソン団体が存在しており，会員の総数は数百万人を推定されています」というhttp://www2.gol.com/users/lodge1/history-j/history-j.html (2011/12/29)。

[16] 前記のウェブサイトには，この横浜ロッジNo.1092 に関する記述もある。日本におけるフリーメイソン・ロッジは，1864年６月（元治元年）に来日して横浜に駐屯したイギリス第20連隊の軍人たちによるスフィンクス・ロッジNo.263 が最初だが，横浜ロッジNo.1092 は，横浜在住の民間人が「自分たちのロッジを設立すべく，イングランドのユナイテッド・グランド・ロッジに新しいロッジの開設を申請」して認可されたものという。なお，明治になってブラックも所属する新しいロッジ「O Tentosama Lodge No.1263」は，妙な名前だが，日本語で表記すれば，「お天道様ロッジ」ということになるのだろうか。

[17]『ヤング・ジャパン２』116ページ。

[18] John Lane, F.C.A.,*Masonic records 1717-1894,* E.Letchworth,1895. 359ページ。同書は在外研究中にイギリス・ケンブリッジ大学図書館貴重書庫架蔵のものを見ることができた。

[19] 前掲同書には，South Australian Lodge of Friendship（269ページ），Lodge of South Australia（289ページ），United Trademen's Lodge（294ページ），Lodge of North Adelaide（302ページ），Lodge of Concord（306ページ），Lodge of Unity Port Adelaide（296ページ）が載っている。

[20] Bennett A, 68ページ。

[21] 太田原在文『十大先覚記者伝』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社，1926年）152ページ。なお，同書のブラックに関する部分は，花園兼定の資料提供によって太田原が執筆したことが，冒頭の「本書の編纂について」（４ページ）に記されている。

[22]『ヤング・ジャパン１』223ページ。

[23] 同，224ページ。

[24] 当日の出来事の詳細と居留民集会のもようなどは，前掲同書，107～126ページ。

[25] 薩英戦争については，萩原延壽『薩英戦争　遠い崖――アーネスト・サトウ日記抄２』（朝日文庫，2007年）を参照した。

[26]『ヤング・ジャパン』211～213ページ。

[27] *Young Japan Vol.*1,p.249。

[28] たとえば，浅岡邦雄「『日新真事誌』の創刊者ジョン・レディ・ブラック」（『参考書誌研究』第37号，1990年３月）は，「結局，オーストラリアでは思うにまかせず帰国することとなり，妻子を先に英国に帰し，文久３年11月（1863年12月）頃，単身で来日した」（39ページ）としている。

[29] 以下の記述は，Bennett B ,146～7ページ。ベネットが参照している香港と中国・上海で発行されていた英字紙については，大英図書館新聞部所蔵のマイクロフィルムで「追試」に努めたが，*Overland China*

Mail の４月29日，５月13日紙面（付録）をのぞいて未見である。

[30]「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」275ページ。

[31] 浅岡邦雄「ヘンリー・J・ブラックの来日時期」（『快楽亭ブラック研究』第２号，1987年９月）11～14ページ。ちなみに，このとき，妻エリザベスは36歳，ヘンリーは６歳である。『ジャパン・ヘラルド』1865年11月11日紙面で上海から入港したグラナダ号の乗客に「Mrs. Black & child 」が確認できる（北根豊編『日本初期新聞全集６』ぺりかん社，232ページ）。また，11月９日の『ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァタイザー *The Japan Times' Daily Advertiser*』にもやはりグラナダ号の乗客として，この名前があり，同日の同紙「船舶情報」欄で，11月8日，561トンのグラナダ号が上海から入港したことが分かる（同，213ページ）。なお，日本で発行された英字紙に関してはすべて『日本初期新聞全集』に拠った。以下，煩雑さを避けるため，注記は本文の該当箇所に巻数とページ数を示す。

[32] ２人が乗った船の出航地は本文記したように上海である。従来，ブラックの妻子はいったんイギリスに帰国していたとされている。ブラック本人がイギリスに帰国するつもりだったことがその推測の根拠だろう。だが，可能性としては妻子は上海にいたことも考えられないわけではない。

[33] Bennett B,146ページ。

[34]『ヤング・ジャパン２』18～19ページ。

[35] カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』（水田信利訳，平凡社東洋文庫，1964年）８～９ページ。カッテンディーケはオランダ海軍軍人。幕府が長崎に設けた海軍伝習所の教官としてポルトガルのリスボンから出航して97日間の航海の後，安政４年８月４日（1857年９月21日），長崎港に到着した。

[36] 拙稿「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」286ページ。

[37] そうした「評価」としては，たとえば「商業活動に従事したが成功せず，金鉱のコンサート歌手をしていたとも伝えられる」といった浅岡邦雄の表現がある（土屋礼子編著『近代日本人物誌』ミネルヴァ書房，2009年，12ページ）。

[38]『ヤング・ジャパン１』224ページ。

[39] 河合勝「日本古典奇術『胡蝶の舞』について」（『愛知江南短期大学紀要』2008年３月）137～173ページ。同論文は「胡蝶の舞」に関する包括的な資料探索を行っており，隅田川浪五郎やアサキチの芸が欧米の新聞に取り上げられた事例を紙面とともに紹介していている。

[40] この点に関して，インドから上海までブラックの足跡を追う「導き手」になってくれたベネットも「一見，これは同時期に極東に2人の“J.R.”Blacks が存在したような外観を与える。しかしながら，他のすべての事実は圧倒的にまちがいなく1人の人間だったことを指し示している」と注記している（Bennett B, 346ページ）。

[41] 鈴木雄雅「ある英国人新聞発行者を追って――A.W.ハンサードの軌跡」（『コミュニケーション研究』第23号，1993年）67～102ページ。

[42] この組織について，鈴木は「会員制のコミュニティカレッジのようなもので，定期講座以外にしばしば講演会を主催したり，図書館を整備して植民地人（当時）の教養の向上に貢献したであろうことがうかがい知れる」としているが（鈴木，前掲同論文，95ページ），The Mechanics Institute は19世紀以降，欧米各地で設立された職人や熟練工向け教育施設で，オークランドでは1841年に設立されている（http://christchurchcitylibraries.com/Heritage/LocalHistory/MechanicsInstitute/ (2012/1/4)。

[43]「アルバート・ウィリアム・ハンサード年譜（仮）」，鈴木，前掲同論文，88～89ページ。

[44] ブラックのインド渡航以前の詳しい履歴は，「来日以前のジョン・レディ・ブラック」を参照。

[45]「来日以前のジョン・レディ・ブラック」46～50ページ。

[46] ギルドホール図書館の Reference Code は，CLC/210/F/018/MS22549。

[47]「オーストラリアのジョン・レディ・ブラック」272ページ。

[48] Derek Whitelock, *ADELAIDE 1836-1976 :History of Difference,* University of Queensland Press, 247ページ。1867年のデータでは，アデレード市内に18のprinting pressesがある（同書，161ページ）。
[49] 以下，この時期の横浜における英字紙の状況については，主として鈴木雄雅「解説　日本における初期欧字紙について」（北根豊編『日本初期新聞全集１』ぺりかん社，1986年）ixページ。
[50] F. ダ・ローザはブラックが『日新真事誌』を創刊する際に協力した援助した人物だが，マカオ生まれのポルトガル人で，日本語が堪能だったという以外，くわしい履歴その他は不明である。
[51] チャールズ・D. リッカビィは，日本初の外国銀行とされる西インド中央銀行横浜支店支配人として来日した。同銀行を退職後，『ジャパン・タイムズ』を創刊した。ブラックも『ヤング・ジャパン』の中で，『ジャパン・タイムズ』の創刊とリッカビィのことにふれ，商業会議所の創設を彼の第一の功績としている（『ヤング・ジャパン２』64～65ページ。
[52] 蛯原八郎『日本欧字新聞雑誌史』（名著普及会，1939年初版，1980年復刻版）73ページ。
[53] この記事の存在は，Bennett B（147ページ）で知り，大英図書館新聞部でコピーを入手した。
[54] 鈴木雄雅，前掲論文，89ページ。
[55]『ヤング・ジャパン2』187ページ。

〈補注〉校正段階で，ジョン・レディ・ブラックの横浜におけるフリーメイソンとしての履歴を知る史料に接した。幕末・明治期に香港や横浜で発行された「人名録 directory 」類を復刻した立脇和夫監修『幕末明治外国人機関名鑑　第一巻　1861－1875年』（ゆまに書房，1996年）に収録されているもので，John R. Black（J. R. BlackあるいはBlack, J. R. と表記されている場合もある）は，1869年と1871年には Yokohama Lodge の *organist* として登場し，1873年には O Tentosama Lodge の *Senior Warden*，1874年には同じ Lodge の *Worshipful Master*，1875年にはやはり同じ Lodge の *P. M's* の１人として，その名前が出ている。*Organist* は「オルガン奏者」だが，序列をみると，*Senior Warden* は２番目，*Worwshipful Master* はトップである。*P. M' s*は「肩書き」のついた名前が並んだ最後に，この表記でブラックを含む３人が出ており，Master 経験者を指すと思われる。